

三、ロツパ・ヒューマニズムの限界

ヨーロッパ・ヒューマニズムの限界

会田雄次

新潮社版

ヨーロッパ・ヒューマニズム
の限界

昭和四十一年九月二十日 印刷
昭和四十一年九月二十五日 発行

定価三五〇円

著者 会田雄次

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七一
電話東京(260)二一一二(大代表)
振替 東京 八〇八番

印刷・株式会社 金羊社
製本・新宿 加藤製本所

ヨーロッパ・ヒューマニズムの限界
目次

ヨーロッパ・ヒューマニズムの限界……………	セ
近代化と伝統文化……………	四七
覇者の条件……………	三
栄光と悲惨……………	九〇
戦争体験三題……………	一五
1 ボロ靴と一等兵の死……………	一〇五

2	アロン収容所の二人の兵隊	二四
---	--------------	----

3	泥棒と二人の兵隊	一三三
---	----------	-----

	現代の人倫喪失をめぐって	一四四
--	--------------	-----

	学生と読書	一六一
--	-------	-----

	皇室のあり方について	一六六
--	------------	-----

	あとがき	一九二
--	------	-----

ヨーロッパ・ヒューマニズムの限界

ヨーロッパ・ヒューマニズムの限界

一

ヒューマニズムとは何かというむづかしい問題をここに論じようとするのではない。人間に人間独自の貴重な価値があることを信じ、それは各人の個性の中に特有な姿で分有されているから、自分の価値を主張するとともに、他人のそれをも重んじるという立場がヒューマニズムなのだとい般的に考えておくことにしよう。ところで人々はみな、こういうヒューマニズムはヨーロッパに特有なものと考えている。それがキリスト教の産物なのか、ギリシア・ローマ時代に生れてヨーロッパの土壌の上に成長してきたのか、ルネサンス以後か、市民革命以後、あるいはバタフイルドのいうように産業革命以後の人間生活の一般的向上から後に、はじめて生れたものなのか、そういう詳しいことでは異論があるにしろ、とにかくヒューマニズムとはヨーロッパの特産物だとする立場が、大勢というより殆んど反対者はいない位であるのが日

本の現状である。もつともそれがヨーロッパの歴史が生んだ特産物なのだから、真似したり採用したりはできないものとは、殆んどの人は考えていない。ヒューマニズムそのものはごく普遍的な人間の心的態度でもあるので、日本でも大いにヒューマニスティックな態度を学ぶべきだというのが、これ又一般の意見である。私もこういう考え方に別に異存がある訳ではない。ただそれを学んだり考えたり、ヒューマニスティックに行動しようとするとき、ちよつと考えてほしいことがあるというのである。われわれがヒューマニズムに基いた行動をとろうとするとき、それが「キリスト教とギリシア文化から生れた、などという系図しらべほどバカバカしいことはない。問題は思想を現在いかに行動するかにあるのだ」と桑原武夫氏は指摘する（チヨゴリザ登頂・文芸春秋・昭三四年）。学者のヒューマニズム研究がわれわれの行動規範として全く無意味な文献学的遊戯におちこんでしまっていることは本当だ。しかし、ヨーロッパのヒューマニズムと何等かの意味で対決しなければならぬとき、その本質を知っておくこと、つまり単なる系譜しらべでなしにその本質から来る限界を知っておくことは無意味なところではない。それを知らねばわれわれが何の行動もすることができない事柄だと私は思う。しかも現在の日本が直面している問題は——登山のように、真剣ではあるが一つのあそびにすぎない行動はその中に入らないが——真面目にとりくめば、皆このヨーロッパとの対決をふくんでいるのだ。対決するというのは、向うは向う、こちらはこちらではすまない場合なのである。

ヒューマニズムはヨーロッパが本場で、それに学ぶことで、本来ヒューマニスティックなもの

と無縁な日本人もヒューマニストになることができるという考え方の一つの代表として、竹山道雄「ビルマの豎琴」をとりあげよう。この本は少年向きに書かれた戦争物語であるが、第二次大戦の生んだ日本の戦争文学の白眉であり、大きい話題をわれわれに提供した。ここでとりあげても場ちがいではないだろう。物語の場面は終戦直後のビルマ戦場である。あるインテリの隊長にひきいられビルマ戦場をさまよいつつ戦っていた小部隊が、終戦を知り、英軍に投降し、ビルマ南東岸のモールメン地区——そこに収容所があった——に送られる。その途中、終戦後も尚抵抗する一日本部隊へ投降説得のためこの部隊の水島という兵長が派遣される。水島の説得は成功せず彼はその部隊とともに英軍の総攻撃をうける。部隊は全滅する。ここで自分の単純な英雄主義のため部下を犠牲にする隊長が、日本的性格を強く担うものとしてえがかれ主題の一つの前奏曲をなしている。水島兵長は偶然生き残り、あるビルマの老人に救われるが、身体を回復した水島はこのビルマ人の好意にそむき僧侶に変装して、南下し部隊に追及しようとする。その道で彼は遺棄された日本兵のおびたしい死体を見、初めは発見するごとに自分で埋葬していたが、あまり遺棄死体が多いのと部隊恋しさの念が強くなったのとで埋葬をあきらめ部隊を追及する。部隊に追及さえすれば日本へ帰れるという希望が、水島をこういう行動へ激しく追いやる原因であった。「利己主義」の勝利である。ところがその途中、戦死者を埋葬している英軍部隊に会う。しかしこの人々は英人を葬っていただけでなく、同じような丁重さで日本の兵士——おそらくは重傷をうけイギリス軍に収容されたであろう人々の——死

体を埋葬しているのである。同胞である自分も捨てた死骸を敵のイギリス軍がこのように葬ってくれている。水島は愕然とする。そして自分も部隊に復帰することはもちろん故郷に帰る望みも捨て、ビルマ全土にちらばっている死体を埋めることを決心する。のち彼は収容されている自分の部隊と会うが水島とは名乗らず、水島らしいと思って呼びかける戦友たちにも答えず、その決心を示した手紙を、帰還船の中でよんでくれるようにと人に託して、部隊の人々の視界から姿をかくしてしまふ。

この物語の場面は、灼熱した熱帯の荒涼とした原野、敵意と敵意の激突している大戦場である。そこでさえ尚發揮された英軍のヒューマニズムによつて一人の日本の青年が、ヒューマニズムに目覚める。その青年の雄々しいが淋しい決心・ヒューマニズムの成長が物語の核心である。イギリス人だけがヒューマニズムを持っている。それに触れなかった日本人には遂にヒューマニズムを持ち得なかったというのが著者の根本観念である。それは帰還船中で隊長が兵士たちに読んで聞かせる水島の手紙とそれに対する兵士たちの態度に現わされている。水島は死体を埋葬するだけでなく、ビルマで自分の将来を犠牲にしても何かやらねばならないと感じ、それを戦友達に訴えた。しかも著者は、英軍のヒューマニズムに触れなかった故に、戦友たちは水島のこの気持が判らなかつたものとしている。本文中に私という名で現われるこの物語の語り手は、水島の手紙の朗読を聞きながら、もう心は水島から離れさつて全くそれと関係なく自分の故郷のことを想いうかべていることでそれが示されている。それが物語の結尾であるだ

けに何か読者の心にひっかかるものを残すだろう。

ところで私はこの文章を読んで非常に心をうたれた。同じように私も一上等兵として二年間ビルマで戦い、多くの戦友たちを遺棄して、それも死体ではなく病人や負傷者をも、自分の命を全うするために放置して逃げて来た男である。こうして三百人いた私の中隊で残ったものは十数人に過ぎない。終戦後部隊と共にラングーンでイギリス軍の苦役に二年余を服した。しかしこの服役中、感じたのはイギリス軍のヒューマニズムではなくて一見丁重な英軍当局の取扱いの中に、日本人を絶対に人格として評価しないアングロ・サクソン人というもののたとえようもない冷たさだけであった。彼らの私たちに対する待遇は、捕虜の労働をより有効にするために、日本人の虚栄心に訴えたただけのものであった。我々は戦争中の投降者と区別され「被武装解除軍人」(disarmed military personnel)として、日本軍の階級制度を維持し自治を保つことも許された。一見「日本的」名譽を重んじた取扱いである。しかしそれはインド人の一士官が私に語ってくれたように「使役に便利で能率があがるから」に過ぎない。実際の待遇・衣・食・住・労働条件などは、交戦時に投降し、われわれとは区別され、別に収容されていた「捕虜」(captured)より遙かに悪かった。われわれは、戦時中の英軍捕虜虐待に対する報復として無期限重労働という宣言をされた。あるいはそれはおどしであったかも知れない。しかしラングーンに集結した数万の日本軍は全員まる一二年間激しい苦役に服したのである。重労働のため負傷者や病人が続出した。あるときウィンチではさまれ左手を失った一兵士は英軍医

の手で応急手当され収容所に送り帰された。この軍医が英軍上官への報告書に「この男は片腕をなくしたが、まだつかえる (useful)」と記されているのを私は盗み読みした。あるときわれわれの食糧として与えられたビルマ米には砂が半分ちかく混入し故障人が続出したので、交渉に当たっていた旧ビルマ兵団の司令部員が変更を願ひ出たが、英軍の返答は「この米は、ビルマにおいて家畜用として使用し害なきものなり」であつた。インド軍と私たちは大変仲よくなつた。イギリス人はインド人と日本人は平等と考えていたらしい。収容後二年度目位からスポーツの交歓試合などインド軍とは行くことは許された。しかし日本人とイギリス人との間には絶対に交歓試合やそれに類する催しを持つことは許可されなかつたし、第一そのような雰囲気など生れるような状態ではなかつた。

なぐられたり、けられたりする例もすくなくなつたが、私を知る限り英軍からうけたひどい待遇というのは、そういう直接的なことではなく、上に述べたような、目立たないが気がついて見ると血が逆流するような屈辱感と反感をそられるそれであつた。直接体験したことでもそのような例は無限に挙げることができる。わたしはイギリス人というものについて、勝者と敗者・支配者と被支配者などと言つたことでは説明のつかないわれわれとの間のギャップを感じて歸つてきた。そして「ビルマの堅琴」を読んだ。深い感銘はうけたものの、実際のイギリス軍との交渉でうけたぬぐい難い彼らへの不信任と、この書に示されているような日本人のイギリスへの信頼と親しみと崇拜感との矛盾は、どう解決したらよいのか判らなかつた。こう

いったことから、わたしは次のような問題提起をしたいと思う。

イギリスをふくめたヨーロッパにヒューマニズムが存在することこれは断言してよい。しかし、これまで日本人は、ヨーロッパがやってきたのを真似して、人間と神との関係だけでヒューマニズムを論じてきた。それはおかしいのではないか。われわれはヨーロッパのヒューマニズムは一体何に対決する必要があるから生れたかということを知る必要がある。それを知ってはじめて彼らのヒューマニズムの適用下限と、その下限を決定しているものは何かということを悟ることができるのだ。

二

戦後間もなく出たライフ国際版の写真にドイツの戦犯処刑の写真が出た(現在それを忘失し巻号を)
挙げることができない)。

広場を埋めた民衆の前で男女の十数人の戦犯が今一斉に絞首刑にかけられようとしている。太い何本かの柱がたてられ横木がわたされ、そこから首しめ用の綱がさげられて戦犯たちの首にまきつけてある。戦犯は三人ずつ数台の貨物自動車の後尾に立っている。自動車は皆向うむきだ。おそらく合図でこの自動車が一斉にスタートするのだろう。そして全員が宙づりになる仕組だろう。戦犯たちは悪びれず、目かくしをされたまま、むしろ昂然と胸を張っている。若い女性もまじっているらしい。彼女たちのもり上った胸部が印象的である。写真の中に一人の男

が七、八歳の子供を肩にのせてそれを見せているのが大きく写っている。ライフはこれを問題にしているのだ。何かの予感に怯えた子供は恐怖の余り父親？の頭にだきつき、その髪をひつつかんでいて、父が無理に見せようとしているかの印象を与えている。解説はそれをとらえ、このような子供にこのような処刑を見せるのは何たることか、やがてこのような子が大きくなったら、そういう人達の作る社会や政治はどうなるかと、激しい言葉で非難している。もっともライフはこれでもって自分たちのやり方を正当化し、ソヴェエト圏のやり方をせめているのだ。だから西欧圏諸国の戦争裁判をうけてきた我々はどちらもどちらじゃないかと反論できるし、アメリカの立場自体も第一に、戦争犯罪人の処罰という思想自体で問題にしなければならぬ。しかしそれはそれとして子供たちにこのような光景を見学させるのは大変ショッキングな話であることは間違いなからう。

ところで、このことが問題になるのは、もう一つの例があるからなのだ。それは同じくライフのクリスマス特集に出たブリュゲルの絵の解説である（一九五四年十二月二十七日号）。いうまでもなくブリュゲルは十六世紀のフランドルの特異な画家である。彼の特色は、極めて写実的なことで、聖書物語を絵にするときでも、それを全く同時代のフランドルの風俗画にしてしまうことである（この点は別にブリュゲルに限ったことではなく、ヨーロッパでは特にルネサンス期ではキリストもマリアも皆、（同時代人になつてしまふ。ただ、ブリュゲルは余りに現代化の度合が強いので特に特徴的に見られるのである）。だから、ここに挙げられたキリストもマリアも紀元前後の小アジアの民ではなく、皆十六世紀のフランドルの百姓として現われる。それは十六世紀のフランドル風俗画であり、それ以外のものではな